

「史実の削除を許すな」

やすなが たかお
安永 貴夫 NTT労働組合・企画組織部長

終戦記念日を間近に控えた8月11日、お盆の帰省の途中で「平和のことを家族で考えよう」と3人の息子と妻とともに広島へ寄った。長男は修学旅行などでヒロシマのことを学んでいたが、二男と三男にとっては初めてのヒロシマである。

「お好み村」で腹ごしらえした後、原爆ドーム、広島平和記念公園、広島平和記念資料館をめくった。

当日は猛暑であったにも関わらず、びっくりするくらい多くの人々が訪れていて、特に、資料館は家族連れでいっぱい。展示物に近づけないくらいであった。

近くにいたお爺さんが「つらいなあつらいなあ」といいながら、お孫さんなのか小さな子に熱心に説明していたのが印象に残った。「こんなもんじゃない」「もっともっとひどかった」「悲しくて説明できない」と……

私の子供は大・高・中と、展示物の説明文を理解できる年齢なので、最初は「なるべく感じるまま見てほしい」と思っていたが、ついつい解説してしまう。それでも、日頃になく真剣に聞いてくれた。

それにしても、この混雑。まだ若い親が小さな子どもを連れて入館していた。「日本はまだまだ間違っていない」と一人納得。

その前の日と同日、テレビではドラマ「はだしのゲン」が放映されていた。我家は家族そろって観賞。日頃は吉本漫才ぐらいしか揃って

観ないのに、子どもたちの真剣な眼差しに「我家もまだまだ大丈夫そうだ」と一人納得（「はだしのゲン」は高視聴率だったとか）。

その一方で、高校日本史教科書から沖縄戦における『集団自決』への軍の関与に関する記述が削除・修正された問題が明らかとなった。

文部科学省が「沖縄戦の実態を誤解させる恐れがある」として検定意見を付して修正を求め、『集団自決』の軍の関与を断定するような表記が修正されたのである。これには納得できない。

文部科学省はこんなニュースを、親は子どもにどのように説明しろというのだろうか。

沖縄県内では、「集団自決は軍命であった」との批判が高まり、県議会や全ての市町村議会が次々と『意見書』を決議し教科書検定意見撤回を求めている。

このような沖縄県民の怒りは当然であり、11万人が参加した「県民集会」に象徴されるように、沖縄の新たな憤りが大きなうねりとなって広がっている。

戦争体験者の高齢化に伴い、戦争の体験を風化させず、戦争の悲惨さを正しく伝えることが求められ、国民も正しく受けとめる機運にあるときに、何を目的に「真実」を隠そうというのであろうか。

こんな動きを受け、政府は「検定意見」の修正を検討しているというが、子どもたちにちゃんと説明できる結論を望みたい。